

## 可視的「所有」に対しての不可視的「存在」 — 貧困を見る眼の回転に向けて —

47—126817 齊藤麻侑子

指導教員：山路永司教授

キーワード：貧困、近代化、疎外、豊かさ、フローレス島、「存在」

### 1. 背景・先行研究

第二次世界大戦後以降の開発援助を概観すると、1990 年代以降、“貧困”が強調され、貧困を動機付けにして援助（広い意味での支援）に加わるアクターは政府や国際機関に限らず多様化している。

では、貧困とは一体何を意味するのか。貧困に関するこれまでの先行研究を整理すると、①貧困を特定することへの関心と、②貧困を現象として捉えることへの関心の 2 点に分けられる。それらの限界を指摘すれば、前者は貧困を何らかの「不足や欠乏の状態」として言明する点に変わりはないこと、後者は個別的・具体的な現象を取り上げるにとどまり、近代化以後の社会との関連性について言及していないことである。佐藤 (2008) <sup>1</sup>が指摘するように、貧困の哲学的研究によってこれらの限界を打開していくことが可能であると考えるが、先行事例は少ない。本研究はそこに挑む。

### 2. 本研究の問題意識・目的・問い

貧困の定義において一般化している「不足・欠乏」という言葉には、貧困をまなざす側に刷り込まれた前提がある。それを再考する必要はないか。

本研究では、「不足・欠乏」という言葉に内包される意味を近代化における喪失という観点から探ることで貧困の相対的な見方を提示することを目的とする。この目的のために本研究では次の 2 つの問いを掲げる。

問い 1: 近代化の過程で見られる「喪われたもの」とはどのようなものか。その喪失の意味と惹起した問題は何か。

問い 2: 近代化以前の社会に不可視的に「あるもの」とは何か。そこにいかなる「豊かさ」があるか。

所有や獲得が目指される近代化の過程では、「ない」から「ある」状態へ移ろうとする考え・動きがある。しかし、近代化を「ある」から「ない」状態への喪失の過程として見ると、我々が暗黙のうちに下している「不足・欠乏」という判断に何が含意されているかが見てとれるであろう。

### 3. 議論

#### (1) 近代化が惹起した疎外

本論では最初に、問 1 への応答を、近代後の社会における疎外状態の観点から検討する。疎外はマルクス<sup>2</sup>によって精緻化された概念であり、彼は労働・労働者においてそれを見出したが、今日、近代化以後の社会における人間一般の様態として見る事が可能である。近代化批判として提出されている様々な議論では、「疎外」と言いかえられる現象が指摘されている。筆者はそれらを統合し、それぞれ、①対象からの疎外、②自己からの疎外、③世界からの疎外、として見ていく。

第一に、近代化が進むに従い、対象<sup>3</sup>に対する人々の働きかけが簡素で粗末なものとなり、自己は対象に対して関係性を持たない「切り身」と化してゆく。この状態が対象からの疎外である。

<sup>1</sup> 佐藤仁 2009 「貧しい人々は何をもっているか：展開する貧困問題への視座」下村恭民・小林誉明編『貧困問題とは何であるか』勁草書房、1-23

<sup>2</sup> マルクス, K., 城塚登・田中吉六訳 1844=1964『経済学・哲学草稿』岩波書店

<sup>3</sup> ここでの「対象」とは、人間を取り巻く森羅万象のこと。

第二に、対象と関わる人間が感性や精神性よりも科学的知性に依拠し、また、対象の獲得が貨幣によって媒介されることにより、自己の対象に対する感覚は「脱色」されたものとなる。そこで起こっているのは自己からの疎外であると言える。

第三に、自己と対象が存立する世界が、システムによって支配された状態においては、自己が生活を営む場としての「世界」は自己によって制御できず、生き方の本質的自由は追求し得ない。この状態は世界からの疎外であると言える。

以上の議論から、近代化した社会に浸透している「疎外」はある面での「不足・欠乏」状態なのであって、それは喪失の帰結であり得ると言える。ここから演繹的に示唆されるのは、現代社会は、物質的・金銭的・近代制度的なサービスを「ある」ということの基準においていることである。

## (2) 低開発において「あるもの」とは何か？

問い1への回答の中では、疎外は喪失の帰結として現れていることを指摘したが、それが本当に喪失と言えるのかについては議論の余地がある。そこで、問い2の回答として、低開発の社会、つまり前近代的社会を検討の対象とし、そこに「ないもの」ではなく「あるもの」をインドネシア・フローレス島の現地調査（2度にわたり計45日）の結果より見出したい。当該地は、貧困率の高さ、疾病罹患率の高さが顕著で、物質的豊かさも確保されていない。

筆者の現地調査によると、この村に「あるもの」は、他者あるいは自然資源との関係性のなかで相互的に補完される生活空間、喜怒哀楽という表現の幅の広さと分け合いの心、つまり村人の精神性そのものであった。それは、相互扶助という実践として目に見えるものもあれば、村人の把握する空間や時間という観念的・不可視的で、測れないものであることもある。喜怒哀楽の自由な発現は個人のみでは達成されず、必ず他者の存在が必要である。その心理を醸成するあるいは受容する社会的な“素地”に「豊かさ」を見出す事ができる。村人は調査者である「私」に対し、「貧しい」と名乗りつつも、なお「幸せ」であることを語った。

この、「幸せである」と語らせる背景には人々の暮らす世界の本質的自由があることを示唆する。

以上の議論から、前近代的社会には目に見えない「あるもの」が見出されるが、それは測ることの困難性ゆえに存在感が把握されない為、「ある」にもかかわらず物質的側面の「ない」という部分だけが強調される状況となっていることがわかる。

## 4. 結論—「疎外」と「豊かさ」からの示唆—

総括すると、所有や獲得が志向される過程で関係性という目に見えない部分での「喪失」があったこと、そして、様々に「ない」と判断を下される低開発の状態には、内的な豊かさが「ある」ということである。この結論を受けて筆者は、目に見えないものの存在が価値の下位に置かれ、疎外という問題として現れたのならば、目に見えないもののうちにある「豊かさ」が、目に見える物質よりも上位に置かれるべきであると主張する。

## 5. 考察

貧困を見るときの「不足・欠乏」は、近代化以後の社会の可視的に把握可能であるものを前提としているが、不可視性という観点を加えることで、貧困を相対化できるだろう。この貧困に向けるまなざしの眼を回転すると、貧困は技術的な方法で解決できる問題ではないということが言えよう。

## 6. 提言

我々の「貧困」に対する眼差しの眼はいかにして回転させる—つまり表だけではなく裏を見ることが可能であろうか。それは、「存在 (Being)」<sup>4</sup>ということへの認識が何よりもまず必要であると提言する。人間の状態を見ると「持つもの」の志向性よりも、「在ること」の志向性を中心的に置いてみると、貧困は彼らの問題ではなく、自らの問題として迫ってくるであろう。

---

<sup>4</sup>フロム, E., 佐野哲郎訳 1976=1977『生きるということ』紀伊国屋書店